

産廃業界 女が変える

週刊

首都圏

「男の仕事」の印象が強い産廃業界で、女性の経営者社員が進び始めます。東京・埼玉、千葉の都下3県の業界団体産廃業廃棄物協会に相次いで「女性部」が結成され、情報交換や勉強会、地域の環境教育や活発な活動を精進している。「不法投棄」を始めとする魚のメーシを根絶し、業界のレベル向上を志すことだ。

(伊藤景子)

もっと柔らかく細やかに

トラックが入りやすきシャッターは目の覚めるようなオアシス。天井の裏には、蓄電池機、機械ショッキングピン、ポツポツの作品が並んでいるようだ。床には防塵の除塵を施してびかびかと磨き上げ、見学通路として。

今年3月、東京都足立区に完成した産廃業物のリサイクル工場「リポーター010」。

「お菓子工場か」と目を丸くした女性同業者の言葉も、「大谷清直」の天狗子社長(右)は産業の聲押し受けています。ホテル勤めを経て1992年、父親の創業に就任した4年前に社長を務めた。

この工場建設は既述の大仕事だった。2年前、約1500平方メートルの格好の土地を見つけて購入。地域長官への説明会を開いた。集まった約40人に「産廃なんて冗談じゃない」と糾弾された。「ごめん、メーシが悪いのだからせめて」だが、「お断り受け入れられ

る清潔な美しい工場にしよう」と決心した。それが形になった。

二本さは、業界団体「東京産廃業廃棄物の女性部」を拓いて。会員は現在80人。夫や父親の後を継いだ女性に加え、「社会貢献」つながりの企業家も。女性部は「環境ビジネス」を軸に、産廃社に就職した若手が増えている。「ごみ屋敷」をいじめる、つらい思ふをした人多いけれど、今ではみんな、大事なかかりがある仕事だと誇りに思っている。

足立区は5年前から産廃部に「環境ビジネス」を軸に、産廃社に就職した若手が増えている。「ごみ屋敷」をいじめる、つらい思ふをした人多いけれど、今ではみんな、大事なかかりがある仕事だと誇りに思っている。



二木部長(左端)の新工場に集まった東京産廃業廃棄物協会女性部のメンバー=東京都足立区、伊藤亨写す

女性を採用している。今は13人のごり人が女性。不況で産廃もつた。明眼で仕事を取

つてる営業ではなく、顧客へのきめ細かく愛顧りや感謝の書き、書翰の正確さを心がけるように。女性に向上心がある。女性に向上心がある。女性に向上心がある。

「ごみ屋敷」をいじめる、つらい思ふをした人多いけれど、今ではみんな、大事なかかりがある仕事だと誇りに思っている。

大手も参入、再編進む

全国産廃業廃棄物連合会(以下、47都道府県の産廃協会)に所属する業者は約1万5千社。ほとんどが中小企業だが、腰つき不況の輸出増土教長(環境経済)によれば、10年ほど前から「製鉄やセメントの大手企業」の参入、小規模業者の連携など業界の再編が始まっている。「昨年から顕しい不況で再編はさらに進み、一業者は近代の経緯セブスやネットワー作り、高い環境技術が必要となり求められる時代だ」と話す。輸出増土教長は「女性部」を軸とした再編は、自由で、ネットワーク作りや宣伝活動の参入、小規模業者の連携など業界の再編が始まっている。「昨年から顕しい不況で再編はさらに進み、一業者は近代の経緯セブスやネットワー作り、高い環境技術が必要となり求められる時代だ」と話す。輸出増土教長は「女性部」を軸とした再編は、自由で、ネットワーク作りや宣伝活動の参入、小規模業者の連携など業界の再編が始まっている。」

先月15日、女性部が今年最初の総会を開いた。代目の二木部長が6年ぶりに現場を訪問し、参加した各感性と行動力を持つて、志を同じうする女性の同業者の集まり……新しい産廃業界の未来を誓う。女性部の活動も、女性部は「環境ビジネス」を軸に、産廃社に就職した若手が増えている。「ごみ屋敷」をいじめる、つらい思ふをした人多いけれど、今ではみんな、大事なかかりがある仕事だと誇りに思っている。

